

# 遭難の記録

## 松原保二氏 白馬岳冬山遭難報告

### 松原保二君 略歴

- ・昭和 24 年 6 月 26 日 大阪市で生まれる
- ・昭和 40 年 4 月 大阪府立旭高等学校入学
- ・昭和 43 年 4 月 京都府立大学農学部林学科入学 山岳部入部
- ・昭和 43 年 8 月 剣沢(定着)、剣沢～黒部源流(縦走)、黒部源流～槍・横尾
- ・昭和 44 年 1 月 白馬岳
- ・昭和 44 年 3 月 立山
- ・昭和 44 年 5 月 鹿島槍ヶ岳
- ・昭和 44 年 8 月 剣沢(定着)～黒部源流(縦走)
- ・昭和 44 年 11 月 北穂高岳横尾谷(定着)、剣岳東面
- ・昭和 45 年 1 月 南アルプス・赤石岳～東沢岳
- ・昭和 45 年 3 月 新穂高～双六岳～黒部源流～薬師岳～槍ヶ岳
- ・昭和 45 年 5 月 立山雷鳥沢BC～剣岳本峰・東大谷・奥大日岳
- ・昭和 45 年 7 月～8 月 日高トムラウシ源流
- ・昭和 45 年 11 月 鈴鹿藤内壁合同合宿参加
- ・昭和 45 年 12 月 白馬岳
- 昭和 46 年 5 月 立山・剣岳スキー登山
- ・昭和 46 年 6 月～11 月 ネパール・インド・パキス



タンヘトレッキング

- ・昭和 47 年 5 月 台高山脈蓮谷遊行
- ・昭和 47 年 8 月 信州佐野坂に友人と山小屋建設
- ・昭和 47 年 11 月 鹿島槍ヶ岳
- ・昭和 47 年 12 月 唐松岳、佐野坂スキー
- ・昭和 48 年 3 月 京都府立大学卒業、大和グリーン造園社に入社
- ・昭和 48 年 12 月～1 月 白馬岳
- ・昭和 49 年 1 月 1 日 白馬乗鞍岳にて遭難

### 遭難経過報告

- ・目標山域 白馬岳
- ・期間 1973 年 12 月 26 日～1974 年 1 月 2 日
- ・メンバー 浜名 秀治(C・L) 二回生 21 才  
東浦 謙二 二回生 21 才  
松原 保二 OB
- ・行動記録  
12 月 26 日 3:00 京都から車が出発  
佐野坂スキー場の松原氏の山小屋泊。  
12 月 27 日 鹿島槍国際スキー場でスキー練習。  
12 月 28 日 樽池のヒュッテ雷鳥へ。

# 遭難の記録

12月29日 9:00 ヒュッテ雷鳥発。15:30 成城大学小屋付近にB・C設営。

12月30日 スキー練習。

12月31日 2:40 起床。4:30 松原 OB、浜名、東浦の三名で白馬岳アタックに出発。7:00 天狗原発。  
8:20 乗鞍岳にてスキーデポ。10:30 小蓮華山。このころより天候悪化のきざし。12:00 三国境。前進か退却か迷ったが、前進に決定。13:00 白馬岳のピークに立ち、いそいで退却。  
13:30 吹雪で視界がきかず、三国境にてルートを見失う。15:00 ルートをようやく発見。  
16:30 乗鞍岳着。しかしスキーデポが発見できず、ルートがわからず。日没と猛烈な吹雪のためビバークとなる。ツェルトを持っていなかったため、岩陰に雪洞を掘るが、すぐに這松が出てきて掘れず。他に適地を捜そうとするが、吹雪が強く視界が全くきかないため、雪洞とはいいいがたい穴で、風雪をうけながら一夜を過ごす。食欲はないが、チョコレートとハチミツを何とか腹につめ込む。

1月1日 5:30 白馬大池の小屋へ向う。(ラジオ故障のため気象通報が聞けず、移動性高気圧がすでに通過してしまって以後数日間吹雪と判断する)。50分間コンパスを頼りに歩くが、リングワンデリングに落ち入り、元の位置へもどってしまう。三名とも急激に疲労を感じる。  
6:30 天狗原に向って出発。雪洞が掘れそうもないので、ルートは判明しないが、下るばかりだから何とかなると考える。約20分間歩くが、猛烈な吹雪のためそれ以上前進不可能。  
7:30 松原氏急速に疲労。8:50 松原氏死亡。9:00 吹雪が弱まったので、東浦は救助を求めるためB・Cへ向う。20分後にスキーデポを発見し、ルートを見出す。途中で大阪白樺会パーティに出会い、トランシーバーによる連絡が大阪白樺会B.Cにもたらされた。その後、浜名も大阪白樺会及び神戸岳志会パーティに出会い救助される。

成城小屋付近にテントを張っていた高田、関田は、付近のパーティから松原たちが遭難したことを知らされた。彼らからトランシーバーを借り受け、長野県警との交信に当たる。彼らの遭難は、県警がトランシーバーを傍受したことによって判明したという。

高田は、近くの成城小屋に駆け込み、生存者の救出を橋村一豊氏にお願いした。高田と山田氏以下6名の救助隊は、成城小屋のスノーボードを持って直ちに上に向かった。天狗原に幕営していたカクテルアルパイン・グループにもお願いして3名の要員とザイルを借り受ける。13:30 遺体を発見し収容。16:00 スノーボードで遺体を成城大学小屋へ運ぶ。高田は京都の連絡本部である小山氏に連絡のためヒュッテ雷鳥へ下る。

1月2日 ヒュッテ雷鳥へ遺体を運ぶ。医師の検死を受ける。死因は疲労凍死。松原氏の御遺族と対面。大町の六角堂にて通夜。

1月3日 大町斎場にて荼毘。

## ・アタックに出発した時の装備

団体装備 ホエーブス、エアマット、ポンチョ、水筒、ラジオ、しの竹2m×18本、ミニコッヘル、三人の1日分の食料。

個人装備 アイゼン、ピッケル、ワカン、ヤッケ、毛手袋、目出帽、オーバーミトン、オーバーシューズ、オーバーズボン、セーター、地図、コンパス、ヘッドランプ、メタ1箱、ローソク大1本、非常食(ハチミツ350g、チョコレート4枚、オボスポーツ1箱)、ゴーグル、ナイフ、マツチ

# 遭難の記録

## 遭難状況について

浜名 秀治

昭和 48 年 12 月 31 日、49 年 1 月 1 日

午前 2 時 40 分起床。無風、快晴とまでいかないが星が見える。隣りの OB テントに声をかけ支度にとりかかる。スキー・シールの締具調整に手間どり出発は 4 時 30 分。三人のザックには非常食、セーターの他、予備の食料とホエーブス、食器に赤旗、ラジオ。成城小屋前のテントを離れるにつれ、空は明るく晴れはじめ、朝焼けを背にしてスキーによるラッセルも快適だった。6 時 40 分天狗原の御堂通過、白馬乗鞍の斜面をジグザグ登行。登りきったところの小さい岩の横にスキーデポ(8:00)。ここから踏み跡をたどる。大池のコルを経て小蓮華に続く稜線に出てからアイゼンをつける。この登りでラスト歩く松原さんが大きく遅れはじめる。風が出てきて、吹き上げられる雪で視界が悪い。11 時小蓮華通過後、ガスが加わり、足元しか見えない。三国境をすぎ頂上へ向かうが手前のピークで引き返すことに決めた。しかしすでに午後 1 時をまわっていた。その帰り、三国境で道に迷い赤旗 2 本をたてた後ようやくルートを見つけたが 1 時間を空費した。前夜もまたそれ以前にも二人の先輩から過去の三国境における苦労話を聞かされた上での失敗であった。登り際の赤旗を忘れたのである。乗鞍で暗くなる。日没にははやいがスキーもみつきりそうにないので近くの岩の根元を掘る。その作業中に男女 10 人ぐらいの集団が電灯をもってガスの中からあらわれ、天狗原への道を聞き松原さんの示す方向に去って行った。ピッケルと手、足、食器で掘りあげた横穴は、たたみ半畳ほどにも足りないがとにかく三人もぐり込む。現役二人が奥に、OB 1 年生の松原さんが出口の所に陣取った。常に背中に風を受ける位置である。(17:30)

穴の中ではローソクをつけても風に消され、この作業を起きてる間中くり返した。湯をつくりたかったが、肝心な時に食器が見当らずホエーブスにも点火しなかった。チョコレートとハチミツを食べる。現役二人にとってビバークといえるものは初めての体験である。

元旦 5 時 30 分。この天候が続くと判断した松原さんの指示で大池小屋に向かうべく穴を出る。一人を先に歩かせ、後から二人が方向を確かめながら 1 時間進んだところでいきなり数本の赤旗と出くわす。出発点に舞い戻ってしまった。再び出る。今度は天狗原目指して。(6:30)。だが東へ行くべきなのに南へ向った(何故そうしたかは不明)。30 分程歩いた頃、最後尾の松原さんが急激にバテはじめる。現在地に確信が持てないことでもあり引き返すことに決定。だがすでに松原さんは満足に歩けず腕を組んで引っ張った。それでも遅れるので東浦は松原さんのザックを持って先に雪洞に帰り浜名が残る。(7:30)

この地点から松原さんは上に登ることがなかった。二本足で歩くこともなかった。四つん這いになったり、笑いながら抱きついたり、転んだりして下る一方だった。東浦を呼んでも風が強くてとどかず、夜は明けたがガスで視界はきかず、途方にくれてると進もうとする反対の方角から黒い影が近づいてくる。走りよったら逆に天狗原へのルートを尋ねられた。しかし事情を説明すると仲間を連れて来ると言い残して別れた。松原さんのもとに帰ると少し鼻血が出ていた。その場を動かないようにしていると遠くを幾つかの人影が横切って行くのが見える。大声で叫んだがやはり聞こえないのか、そのうちガスで見えなくなった。また乗鞍岳の南斜面を下る。そして突然 10m 程転がって岳樺の下に横たわった松原さんの心臓に手をあててみると止まっていた(8:50)。死亡と断定、ピッケルとバンドで滑べらないようにしてその場を去る。

その後、浜名は踏み跡をたどり大阪白樺会、神戸岳志会パーティに保護される(10:30)。

トランシーバの連絡で一足早く下山していた東浦を先頭に救助隊が乗鞍岳まで上がってきて、収容作業が行われた。ようやく晴れ上がった。(13:00)

# 遭難の記録

## 問題と反省

浜名 秀治

我々現役には冬山合宿に対して甘さがあった。「部員が三人しかいなくとも山岳部のだから冬山合宿をせねばならない。」的な発想に、実力と経験を加味して妥協したのが白馬岳であった。その計画は三人力を合わせて主稜線までテントをあげようというものであったのだが、12月初旬に西穂を目指した主将の加藤が風邪で計画から抜けたため、東浦と二人思案にくれ中止を考えたり、槍を目指すW・V四回生二人連れの誘いにも心を動かしたりした。ところが12月18日のコンパの際、OBの松原さんから参加の申し出があり、高田・関田両先輩も同時期に梅池付近にテントを張ってスキーを楽しむという話だった。白馬の計画を練り直した。天狗原にB・Cを置き本峰往復、それにスキー雪洞等の技術習得を目的とするもので、雪に未熟な我々には妥当だろうと思われた。しかしその決定は計画実施の一週間前でありその時点でもまだ出発日が確実に決まっていたのではなかった。「25日深夜、車で出発。」が23日夜になって決定したのである。さらに現役側の不手際として学生課顧問に計画書提出を怠ったことがあげられる。OBへの郵送もしなかった。連絡先を頼んでおいた小山貢氏にもその確認をとったのは出発当日であった。出発間際まで準備に追われ気がついたら忘れていたというもので、その日の夕方松原さんが来られたらしく、ルームノートにはボックスの散らかりようを指摘して、「これで今晚から冬山には入れるのかね」と記されていた。今となっては尤もと思わざるを得ない。だか、白馬は二戦して二勝それも楽勝やっただけとっておられた松原さんにも落度があったようだ。甘さと甘えの中にも恐怖感を抱いていた現役と違って、羽毛服を持ちながら身体につけている純毛といえば腹巻きだけだった点等にそれが表われているように思う。問題になったツェルトの一件は、行動中の過失と共に、もちろん原因の一つに数えられるが、それだけを過大視するのは結果のみから見すぎてると思う。そんな状況に進めてしまった行動の無理と判断の誤りが主な原因だろう。それにそんな計画をした山岳部と参加者全ての考え方の甘さも見逃がせない。私としては、冬山合宿をいとも気安く計画したり変更したり、時には流され引きずられたところに最大の問題点と反省を感じている。

## 松原保二君遭難追悼文

～松原保二氏へ～

東浦 謙二

山は貴兄の死という非常な手段でもって、我々の登山のあり方を問うた。このあまりにも高価な代償として得た教訓を私は大切にしたい。

アタックは午前4時過ぎに始まった。空には星が輝き、前途には何の障害もないように思われた。日の出と共に太陽の光を一斉に浴びた山は太古の自然の姿を取りもどし、異常なほどの美しさをもって我々を待っていた。山の気象の恐ろしさを知りつつも、この山が我々に向かってキバをむこうとは考えられなかった。しかし刻々と山は変貌してゆき、烈風と雪のベールが前進をはばむ。そこには生の実在感と登頂への誘惑だけあった。過酷な自然の中へ我が身を投じようとする欲望にかられ、退却は山への冒険であるかのような錯覚に落ち入っていった。

夜は猛烈な寒気を供なって訪れ、雪はやがて我々を閉込めてしまったが不思議と死への恐怖感はない。眠りの精が訪れ、意識の薄れていく中で人々の顔が次々に浮かぶ。吹雪はすさまじい音を立てていたのであろうが、自分自身は全く静寂の中にいるかのようなのである。

## 遭難の記録

---

長い長い夜、夜は永遠に続くのではないかと疑がわれるほどであったが、やがて白々と朝が訪れてきた。朝は暗闇にとじ込められていた私の本能を目ざめさせた。行動だ！猛烈な吹雪の中を我々は飛び出した。寒気は容赦なく我々の体温を奪い、吹雪は我々を盲人とした。地上と空間の区別もつかない。

光はあるが周囲は何も見えない。貴兄の姿も吹雪の中に消えてしまう。あたかも烈風の中で貴兄が下さったタバコの煙のように。

時がたち、夏か来ようとしている今も、退却の途中、「こんな時こそ落ち付かんといかん。」といって、貴兄がタバコを二本口にくわえて火をつけ、一本を私に下さった時の事が鮮明に脳裏に焼き付いています。

### 山岳会というものを

塚本 珪一

一月一日、冷たく、悲しい日としてはじまった。私達山岳会の若い仲間である松原保二君が、はるかな雪の世界に旅立ってしまった。

山での死は、どうしようもない冷たさと悲しみをともなうものである。

“若いあなたに、私は山への祈りとして、かつてのすばらしい山行のことごとを山の友と共に語ることに  
よって、あなたの山での死をあたためようではないか、  
あなたの心は凍結する山肌と音たてて吹く雪と風の中であって、私達と常に共にあることを、……  
やすらかな、あたたかい山のねむりのあることを……”

まったく、おはずかしい話であるが、今回の事故で、山岳会がまったくまともでないし、組織としての機能がまったくないことに気がついた。冬山に府大パーティがでていうことすら一部の関係者以外はだれも知らなかったにちがいない。そんな中での事故も、現地にいた者、京都からかけつけた小山君等によりうまくやってくれたから、又、いろいろな山岳会の方々の協力もあったからきわめてスムーズにはこぼれていった。

だが、これであっていいはずはない。会というものが、もう少し何とかまとまり、会員が地方へばらばらになっても、一つの流れが常になんかといけないと考える。山岳連盟に加盟しているが、年会費もはらってないし、加盟者としての義務もほとんど忘れてしまっている。

会報もすっかり止ってしまっている。まことに申しわけないが、私達にあたえられた仲間の死というこの事実を前に、山岳会というものを再び考えて見ようではないか。

若い山岳会の人達に、会の再起をおねがいするより方法がないと考える。

かつて芝山君の山での死は、府大山岳会の東大谷での活動のエネルギーとなったのである。あの頃の府大山岳会は生きていた。

松原さんの死が、私達の山岳会再興の物語の序詞になることを……

# 遭難の記録

## 松原君の遭難(『続なんで山登るねん』より) 高田直樹

信州・親の原の「ヒュッテ雷鳥」わきの、落葉松林の雪を少し掘り下げ、シートの覆いをかけてしつらえた遺体安置所の中で、駆けつけたお父さんは、黙って冷たく凍り、固くなったマツバラの顔に、ジッと両手を押し付けていました。

鼻の上位まで、ずり下がり、凍りついてガチガチの毛糸の帽子を、手で温めて融かそうとしているのです……。

あの時、正月のゲレンデの雑踏を避けて山スキーを楽しもうと、カラコルムテントを張っていたぼくと関田は、後輩パーティーが遭難しているという知らせに、そばの成城小屋に駆け込みました。橋村さんは、徹夜で飲み明かした元日の朝だというのに、ぼくの「死んだのはいいとして、まだ生きてるのがいますから」という半ばおどしみたいな救援依頼に、「一番強い山田以下六人をだしましょう」といってくれました。

スノーボードを引っぱって、どんどん登る成城大の人たちから大分おくれ、天狗原でも救援依頼をしながら、ぼくは、白馬乗鞍の大斜面を登りました。

頂上の大雪原につくと、意外にも、ピンピンした一年生が現れ、「マツバラはんが死にました。あっちにいます」リーダーが死ぬなんて……。

その場所は、乗鞍の東側、雪の急斜面でした。

大晦日の夜、二人の新人を従えて、白馬乗鞍頂上の吹雪の大雪原を、リングワンデルング（環状彷徨）を繰り返しながら、スキーデポを求めてはてしなく彷徨ったマツバラは、夜が白くなるころ、ようやく力つきようとしていました。

もう立って歩けなくなり、四つんばいになり、「マツバラはん、ファイト」と声をかけられると、まるで子供が歌うように、「ファイト、ファイト」と、か細い声をあげたそうです。そして、急に、犬が雪に遊ぶがごとく転げまわったり、また、立ち上がり、両の手を天にさしのべ、雪を受け、手を振り足を上げ、それは、全く無表情な顔面とは裏腹に、楽しげに舞い踊るようであったといえます。

二人の一年生は、それを制するでもなく、ダダなす術もなく、つき従い、見守っていたのです。

頂上雪原の東べりで深い睡りに落ちたかに見えたマツバラは、突如立ちあがり、その雪の斜面約百メートルを一気にかけ下り、そこを、眠りの場所としたのです。

そのポツリと見える黒点を見下ろしながら、救援隊は、じっとしていました。こんな斜面を下るのはいやだし、それに、彼らは死体収容を引き受けたのではない。正月元旦にそんなこと誰だってやりたくない。ぼくは一人そこまで駆け下り、「ここです。お願いします」と上に向かって叫びました。

意図したことはなかったけれど、ひどいことをやってしまったものです。

彼らが動き出すのを確かめてから、改めてぼくは、マツバラを見ました。目が開いたままだったので、なんとか閉じさせようとしたのですが、駄目でした。そんな死顔をなんとなく人に見せなくなかったので、ぼくは、急いで、その正ちゃん帽を下に引き下げたのでした。

茶毘がすんで、引返し、その白馬乗鞍から白馬岳までが大変よく見える場所で、ぼくは請われ

## 遭難の記録

---

るまま、彼のルートを説明しました。

白馬の稜線は銀白色に輝き、雪煙があがっていました。

あの雪煙の中は、すごい地吹雪だろうなあ。

その時、ぼくは、急に涙がこみ上げ、胸がつまって、言葉がとぎれました。猛吹雪の小蓮華をこえ、さらに意気盛んに突き進むマツバラの姿が、ありありと浮かんできたからです。

そのルートの怖さをよく知る、ぼくとセキタの十分な注意を全く無視したにせよ、突き進むマツバラの姿に、ぼくは昔の自分を見たような気がしたのかも知れません。

その後、ぼくもセキタも、マツバラの位牌に祈ったことはありません。ぼくも彼も、かなり薄情な男なのかもしれない。これは一つには、あの時、ぼく達は、近くにキャンプしていただけなのに、「先輩がそばについとりながら」とか、「とめればよかった」「ツェルトを持たせなかった」などなど、まるで人殺し扱いをされた。そんなもん、止められるものなら止めております。

でも、そういうことに関係なく、ぼくは、誰かがいったように、＜死んだ人は、思うて思う心にはなく、思われる心に生きる＞と信じています。お焼香したからといって、どうなるものでもない。

ただ、お父さんが、あの時、じっとマツバラの顔を押しさえながら、ポツリといった、

「みんなこいつが悪いんですよ」

という、あの一言は、激しくぼくの胸につきささりました。(後略)